様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５００６８４

研究課題名（和文）現象学的運動学の可能性－身体教育としての運動指導を目指して－

研究課題名（英文）Possibility of a Phenomenological Theory of Human Movement -For lesson of movement as education of human body

研究代表者
瀧澤　文雄（TAKIZAWA, Fumio）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：５０１１４２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、運動実践についての新たな理論を構築するために、現象学的運動学の可能性を提示することである。その運動学を成立させる研究方法として三段階が導かれた。すなわち、分析のための準備段階、分析方法に自覚的になり、その方法を分析に適用する段階、そして考察の段階である。この新たな現象学的運動学の内容は下記のように構想された。第Ⅰ部は現象学的運動学についての導入、第Ⅱ部は人間の運動実践を分析する方法として現象学的方法を提示し、第Ⅲ部では現象学的分析によって得られた成果を体系化したものの提示である。要するに、現象学的運動学によって、われわれは身体教育として運動指導が可能となるであろう。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to show a possibility of the phenomenological theory of human movement as a new theory for movement practice. As a result, it was that there are three steps as a proper method of research, i.e., preparatory stage for analysis, the stage that we becomes conscious to the method for analysis and applies it to the analysis of human movement, and the stage of consideration. The content of the new phenomenological theory of human movement is planned as follows. Section I is an introduction to the phenomenological theory of human movement. Section II shows the phenomenological method as a one of analyzing human movement practice. Section III is a systematized theory of the result obtained by the phenomenological analysis. In short, it would be necessary for us to teach students sport as education of the human body by the phenomenological theory of human movement.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ、身体教育

キーワード：身体教育学　身体性哲学　運動実践　思考の論理　現象学

１．研究開始当初の背景

学校教育において児童・生徒に運動を指導するためには、個々人の能力に対応できる具体的な運動学が必要となる。その運動学では、主体という概念を持ち込み分析する必要が生ずる。すなわち、児童・生徒各々がどのような身体を保持し、何を意図して運動しているのか、を視野に入れる必要がある。よって、科学的方法よりもむしろ、現象学的分析方法が有効な手段になる。また、運動についての意識的課題を解決するには、通常では気づくことのない多くの無意識的課題の解決が必要になる。このことを明らかにする方法としても、意識を焦点に当てた現象学的分析方法が有効となる。しかし、これは哲学的な方法であり、それを体育学に持ち込むためには、その方法そのものについての研究も必要となる。

本テーマに関わる研究には、ドイツのクルト・マイネルによって提示されたスポーツ運動学がある。それは、人間の運動を外側から捉える運動学についての批判を含んでいる。このマイネル運動学は、科学的データになりにくい習得段階を設定し、運動の徴表をカテゴリーとして提示している。しかし、マイネル没後、ドイツではその後継者が客観的科学を志向し、マイネルの意図したものとは異なった自然科学的方向に軌道修正されてしまった。よって、マイネル運動学はドイツ国内では注目されなくなった。ところが、そのマイネルの運動学は日本において金子明友によって研究が継承されている。その金子の運動学について言えば、現象学的視点を持ってはいるものの、難解であり学校現場で活用できるとは言い難い。よって、児童・生徒を具体的に指導する教員に対して、より分かり易く取り組める運動学を、新たに提示する必要がある。この提示によって、体育実践に役立てたいと考えている。

筆者はこれまで、現象学的観点から体育学における身体論を研究してきた。それは身体運動を担う「身体の論理」という大きな枠組みでの研究である。この研究の一貫として、科研費によって本年度末まで身体的思考の論理について研究を行っている。これもまた、より豊かな運動実践を可能にさせる、という目的のための研究である。生活を豊かにするために身体を教育することは体育の使命であり、それを具体化するための運動学を提示することが、本研究の課題である。

２．研究の目的

本研究の目的は、運動学の新たな領域として、現象学的運動学を提示することである。この運動学は、身体それ自身の教育を目指し.その教育に不可欠な運動についての学である。これまでの運動学は、運動を客観的に分析することで成果を上げて来た。しかし体育の授業では、運動を客観的に分析し説明するだけでは不十分である。すなわち、単に運動ができるようになるだけでなく、運動のできる身体が育ち、それによって児童・生徒の生活が豊かになる必要がある。そのための運動学を本研究で明らかにしたい。

加えて、主体の意図を含む人間の運動には独自の論理があり、その独自性を活かした運動学が現場の体育でも必要となる。その意図を扱いうる現象学的方法を探ることも重要な課題となる。

３．研究の方法

本研究は、人間の運動に関わる現象学関連の文献や運動学関連の文献を中心に、文献研究によって考察を進める。それと同時に、現象学的分析方法を用いて、運動実践および運動指導について考察する。さらに、その研究方法そのものも考察対象にし、現象学的分析を行う。

研究の初年度は、人間の身体運動が持つ独自性とは何かについて考察する。特に人間学の立場に立って著作を残しているボルノー、ボイテンディク、ヴァイツゼッカー、ゲーレン等の文献を研究することによって、人間の身体運動が持っている独自性を明らかにする。運動を実践するとはどういうことか。実践の中で人とやり取りできるとはどういうことか。運動の意図と実践との関係は何か。これらの問について考察し明らかにする。それは運動主体から見た運動の捉え直しでもある。さらに、その身体運動について、これまで研究してきた現象学的観点からの検討を加える。これにより、身体教育としての運動学の可能性も探ることになる。すなわち、これまで筆者が行ってきた賢い［からだ］の教育と連動した運動学の可能性である。

初年度の研究で明らかになった運動の独自性に対して、これまでの運動学は応えているのか、という問に答えることが、2 年目の研究課題となる。その検討のために、運動主体の観点と現象学的観点を不明確ながらも取り入れているマイネル運動学を、ドイツおよび日本の文献研究として考察を行う。その際、特に現象学的観点を明確に持つことによって、運動指導について研究する際に必要となる新たな方法をも提示したい。この考察には、バイオメカニクス等の運動学および運動指導論の比較・検討が含まれている。また、現象学的観点からの運動指導の現状把握も同時に行う。先に触れたように、マイネルの運動学は主に金子明友によって日本に紹介され、彼自身が日本における運動学を理論的にも実践的にも先導してきた。よって金子の研究を中心に日本における運動学研究の現状とその方法について検討する。同時にドイツでのマイネル運動学の研究動向を調査研究し、その限界と可能性を探りたい。さらに、ドイツにおける運動学の研究動向を探るた

めにライプチヒ大学図書館で資料を収集し、その際に関連教授に面談する。筆者のこれまで行ってきた身体的思考を含んだ「身体の論理」についての研究を背景に、マイネルの運動学を再構成し、新たな現象学的運動学の素描を提示したい。これは身体の論理から観た運動学の再構成でもある。

最終年度は、体育現場で必要となる運動学とはどのようなものか、について考察する。前年度までの検討を、体育が行われる現場から捉え直す。すなわち、具体的に児童・生徒を指導するために必要な方法と内容を、体育の目標と関連づけて考察する。特に現場の教師が可能となる研究方法を検討し提示したい。それは体育独自の現象学的方法となる。その中には、現象学的記述の可能性、また、体験的記述を引き出す設問の作成が含まれる。それによって現象学的運動学の構想として、より現場に直結した運動学が提示できると考えている。つまり、運動指導の際に、できるために何を分からせるか、どのように教えるのか、について明示したい。これは、現象学的観点からの運動指導であり、具体的な運動指導の方法でもある。言い換えれば、実践者の外的観察から実践者の内的実践へと視点を移すことで可能となる指導である。それによって、「こうなっている」という運動実施の不適切さの指摘から、「こうしてみたら」という運動の実施を変容させる援助へと、指導が変わることになる。これらのことを明示したい。以上によって新たな目的・方法・内容を備えた現象学的運動学を提示したい。

４．研究成果

(1)．初年度（2011）は、人間の身体運動が持つ独自性とは何かについて主に考察した。特に人間学の立場に立った文献を研究することによって、人間の運動が持っている独自性を探った。また、運動を実践するとはどういうことか、実践の中で人とやり取りできるとはどういうことか、運動の意図と実践との関係は何か、という問について、現象学的観点から検討を加えた。これにより、身体教育としての運動学の可能性、すなわち、これまで筆者が行ってきた賢い［からだ］の教育と連動した運動学の可能性について考察した。

また、運動主体の観点と現象学的観点を不明確ながらも取り入れているマイネル運動学について、特にドイツにおける研究動向を調査研究し、その限界と可能性を探るために、ドイツライプチヒ大学図書館を中心に資料の収集を行った。同時に、マイネル教授の教え子である Dr. Christian Hartmann 教授から講義を受け、さらに体育哲学関連の Dr. Arno Mueller および Dr. Emanuel Isidori）に面談した。その際、バイオメカニクス等の運動学および運動指導論の比較・検討も行った。以上の内容を、第 33 回日本体育・スポーツ哲学会（H.23 年・長崎開催）において「現象学的運動学の必要性」として発表した。

(2)．次年度（2012）は、主に現象学的研究方法に関わる文献の検討および考察を行った。新たな現象学的運動学を可確立するには、人間の身体運動を扱い得る方法が必要である。その方法は、意味や意図を伴っている身体運動と、その運動を可能にする身体を視野に入れなければならない。本研究テーマである身体教育を目指す運動学は、この現象学的方法を提示することが大きな課題となる。よって、この方法に焦点を絞り込み、現象学関連の文献研究を行った。加えて隣接領域の研究方法について、質的研究に関わる文献研究を行った。さらに不十分であった人間学の立場に立った文献をも同時に検討した。これらの研究から、体育学における現象学的方法を手順として明示化するために、担当している実技授業の中で、その仮説的方法が有効であるかについて検討した。

上記研究の一端として、2012 年度の国際スポーツ哲学会第 40 回大会（ポルトガル開催）において「An Idea for a Phenomenological Theory of Human-bodily Movement（現象学的運動学の構想）」について研究発表を行った。その内容は、新たな運動学の構想を、特に現場教員が活用できる方法に焦点化して、それを手順として明示することを試みたものである。本テーマにかかわり現象学、運動学そして教育について意見の交換ができた。現象学的方法を分かり易い手順として運動学への取り込むために必要な課題を見出すことができた。

(3)．本研究の最終年度（2013）は、これまでの研究を体育が行われる現場から捉え直し、体育現場で必要となる運動学とはどのようなものか、について考察した。すなわち、具体的に児童・生徒を指導するために必要となる方法と内容について、身体の教育と関連づけて運動学を考察することが課題であった。特に現場の教師が可能となる研究方法・内容を中心に検討した。それが体育独自の現象学的方法を備えた運動学となる。それは、多くの知識を必要とするものではなく、あくまでも現場の教師が活用できる方法と内容であり、簡潔で明瞭でなければならない。

この運動学は身体の教育を目指すものであり、運動指導の際に、できるために何を分からせるか、どのように教えるのか、が中心となる運動学である。この運動学による指導は、現象学的観点からの指導であり、実践者の外的観察から実践者の内的実践へと視点を移すことで可能となる指導である。言い換えれば、それによって、「こうなっている」という運動実施の不適切さの指摘から、「こうしてみたら」という運動の実施を変容させる援助へと、指導が変わることになる。

以上の内容を踏まえ、新たな目的・方法・内容を備えた現象学的運動学の構想および

概要を研究成果として下記学会で発表した。すなわち、平成 24 年 9 月にカリフォルニア大学フラトン校で開催された第 41 回国際スポーツ哲学会において「Introduction to the Phenomenological Theory of Human Bodily Movement for Physical Education（身体教育のための現象学運動序説）」である。

最終年後半では、現象学的運動学全体の構造を検討し、個々の内容を再検討した。すなわち、なぜ現象学的運動学が必要なのかについて、意図との関係を含め人間の運動そのものの意味を再検討することによって、新たな現象学的運動学のより整合的な論理構成について考察した。人間の運動は、物の運動とは異なって、ある意図のもとに世界との関係を築く実践であり、身体の能力は、その運動実践によって賢い［からだ］として育っていくもまた明らかとなった。よって、その運動実践を通して身体を教育しなければならない。さらに、本テーマの重要な課題である方法に関して、現象学的観点を持つ運動学の検討を加えた結果、それらは体育現場にとって難解な状況があり、その対応として 3 段階の現象学的方法の枠組みを提示することができた。

(4)．要するに、新たな現象学的運動学は次の二つの独自性を持っている。すなわち一つ目は、体育学独自の現象学的方法である。この方法が必要となるのは、本運動学が運動実践を説明するのではなく、運動主体が運動を習得し実践するための理論だからである。そのために、意図･身体･思考を扱うことできる現象学的方法を採用しなければならない。二つ目は、運動実践に不可欠な身体的思考を扱う点である。運動を実現させるためには、言語的思考ではなく身体的思考を扱う必要があるからである。新たな現象学的運動学は、実践する主体から運動を分析し、運動の意図を身体との関連から捉えるものなのである。

現象学的運動学は，運動についての説明ではなく，身体の教育を背景に運動を具体化する理論の追求であり，運動を分析するための理論体系でもある．すなわち，運動実践によって生ずる世界を分析し，身体運動をつくるための論理についての学問である．そこには，身体的思考を扱い得る現象学的方法の明示が含まれている．それによって，身体の教育としての現象学的運動学が確立され，身体運動の診断と処方が可能となるであろう．

これまでの 3 年間の研究をまとめた原著論文として、「『現象学的運動』論考－身体を教育するための運動学－」という題目で、スポーツ哲学研究に投稿し、2014.4.28 日付で受理されている。3 年間の研究をまとめたものとして、さらに本テーマについての報告書（総頁数 135.）を作成し、研究成果として公開した。

本テーマについての研究においては、身体教育のための現象学的運動学の必要性と基本的枠組み、その運動学に不可欠な体育における現象学的方法について、暫定的ではあるが提示することができ、研究成果を公表することができた。当初の年次計画は変更せざるを得なかったが、研究計画はおおむね達成できたと考える。しかし、具体的な現象学的運動学の内容は、時間不足のため取り纏めることができなかった。これからの研究課題として取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 滝沢文雄 (2014)、「現象学的運動学」論考－身体を教育するための運動学、体育・スポーツ哲学研究、Vol.36-1: 受理済み（受理日 2014.4.28）（単著）査読有
② 滝沢文雄 (2014)、現象学的運動学の可能性－身体教育としての運動指導を目指して－、H.23～2 科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書、総頁数 135、査読無
③ 滝沢文雄 (2011)、身体的思考における下位〔動作〕の役割、体育学研究 Vol.56: 391-402（単著）査読有

〔学会発表〕（計　4　件）

① Fumio TAKIZAWA, A Phenomenological Consideration of Human Movement Practice, Taiwan Body Culture Society 2013 (Taipei), 2013.10.5（単独）招待講演
② Fumio TAKIZAWA, Introduction to the Phenomenological Theory of Human Bodily Movement for Physical Education, The 41th Annual Meeting of the International Association, for the Philosophy of Sport (Fullerton, California), 2013.9.6（単独）
③ Fumio TAKIZAWA, An Idea for a Phenomenological Theory of Human-Bodily Movement, The 40th Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport (Porto, Portugal), 2012.9.15（単独）
④ 滝沢文雄，現象学的運動学の必要性，平成 23 年度日本体育・スポーツ哲学会（長崎県美術館），2011.8.20（単独）

５．研究組織

(1)研究代表者

瀧澤　文雄（TAKIZAWA Fumio）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：50114294